

要旨

システム内製化を成功に導く要件定義の極意

【研究背景】

グループメンバーは以下の課題を抱き、システム内製化（以下、内製化）に適した要件定義の研究に参加した。

- ・ 内製化するために要件定義で何をしたらいいのか知りたい
- ・ 要件定義の進め方が不明確である（自社での確定した方法論が無い）
- ・ 内製化は失敗のイメージが大きいが、成功させる秘訣が存在するのだろうか
- ・ 内製化の要件定義に着手しているが、何に留意すべきか分からない

グループメンバーの思いから、内製化する際の要件定義はどう進めるべきか、また内製化を成功させるには何が必要だろうと考え「システム内製化を成功に導く要件定義の極意」を研究テーマとした。

内製化経験者がグループ内に不在であったため、研究は内製化の定義をすることから始めた。

『内製化とは』

当グループでの内製化の定義を以下の通りとした。

定義：

「外部へ委託していた業務を自社（及び自社グループ）で実施しようとする試み」

これは開発工程を全て自社（及び自社グループ）の社員のみで作業することが内製化では無く、外部委託していた部分を減らし、なるべく自社（及び自社グループ）の社員で作業を行う取り組みを内製化と定義した。

【研究内容】

1. 以下を調査し内製化の課題とは何かを分析した。

(1) 内製化事例

- ・ 業界問わず 21 社の内製化事例について調査を行った。特に内製化に着手した目的や実施体制等について調査を行った結果、要件定義工程の実施体制により、内製化の成功・失敗の明暗を分けた事例等も見つかった。

(2) 内製化する/しない際の要件定義工程での手順

- ・ 要件定義の手順の調査分析により、内製化を実施する場合は内製化実施可否の検討と内製化範囲の検討が手順として追加されることが分かった。

要旨

(3) 内製化の要件定義工程でのメリット・デメリット

- ・ 内製化を実施時の要件定義工程でのメリット・デメリットを調査した。

メリット

- ・ 成果物の標準化が可能である
- ・ 業務要件を漏れなくヒアリングが可能である
- ・ 短期間での合意形成が可能である

デメリット

- ・ 手順や成果物が不足する恐れがある
- ・ 課題の優先度、重要度の客観的判断が困難である
- ・ 技術的な問題解決が困難となる場合がある

2. 調査内容を分析した結果、内製化の課題は以下にあると考えた。

- (1) 専門的な技術はベンダーに頼らざるをえない事
- (2) 既存社員の技術レベルが不足している事
- (3) ユーザが要件定義へ積極的に参加できていない事
- (4) 内製化するための技術力がない事
- (5) 内製化するシステムの範囲を絞り込むことが難しい事
- (6) ユーザ要件がまとまらない事

3. 課題を洗い出し集約した後に、内製化の成功をより盤石にできるチェックポイントを作成した（具体的なチェックポイントは当日の発表で提示）。また、UNIRITA ユーザ会会員に対してアンケートを実施し、掲げたチェックポイントが実際に効果を発揮できる内容であるかを検証した。

【まとめ】

内製化ありきでシステム開発に着手する事は危険であり、内製化対象の範囲選定および開発体制の確保が重要項目であると考えます。

具体的な提言および提言をまとめた極意については、当日の発表にて提示する。

「文章内の記載の会社名および製品名は、各社の登録商標または各社に帰属する標章もしくは商号です。」